『高見順全集』未収録小説・「眞砂子」の紹介・解題

松本和也

この度、高見順（明治40年～昭和40年、本名＝高間芳雄）の全集未収録小説として「眞砂子」が発見された（参考・『高見順全集』全二〇巻・別巻一巻、勁草書房、昭45～52）。ここに簡単な解題を付して、その全文を紹介しておきたい。

目にする機会の少ない雑誌を渉猟して「眞砂子」を発見したのは、斎藤理生氏（大阪大学大学院）である。斎藤氏が『奥の奥』を調査・発見する契機となったのは、太宰治「二十世紀旗手」（『改造』昭12・1）の評釈作業[1]を通してであるという。同作の六唱～八唱には、雑誌『秘中の秘』に関わる記述がみられるのだが、その雑誌のモデルとされたのが、『奥の奥』なのである。掲載誌『奥の奥』は、まとまって所蔵している図書館がなく、文学事典・雑誌事典の類にも記載が見当たらないもので、斎藤氏の労を多としたい。詳細は斎藤氏の評釈[2]に譲るが、同文でも引用されている津島美知子「「奥の奥」」[3]が、『奥の奥』についての最もまとまった情報であるように思われる。まず、その冒頭部から引いてみよう。

全集第十巻に「『二十世紀旗手』断片」と題して収録されている、生前未発表の原稿断片は「改造」に発表された「二十世紀旗手」の一部、「七唱　わが日わが夢」――東京帝国大学内部、秘中の秘――（内容三十枚。全文省略）とある、その省略された三十枚の一部と推測されている。けれども執筆、成立の過程から言うと、この断片は「二十世紀旗手」の一部として書い

たのではなく、本来全く別の雑誌の注文で書いた原稿が採用されず手もとに残っていて、その原稿につづいて執筆した「二十世紀旗手」の七唱に、題だけを入れてその内容は暗示するにとどめ、六唱、八唱にその売れなかった原稿にまつわる太宰と編集部との応酬を入れたのではないだろうか。

つづいて、右にいう「別の雑誌」が『奥の奥』なのだという津島美知子は、同誌の広告文を読んで「エロ・グロを売り物の面白くて安いという、低俗な雑誌で、これが婦人雑誌中最高級といわれた「婦人画報」と同じ社からの刊行物とは意外な感じ」[4]だと評している。それでも、補助線として当時の新進作家がおかれていた状況[5]を考慮してみれば、「このような媒体に書くこと自体は、若い原稿生活者として不自然ではなかった」[6]はずである。

ここで、高見順「眞砂子」の初出情報を確認しておく。

・掲載誌『奥の奥』十月号（昭和十一年八月三十日印刷納本／昭和十一年九月二十五日発行）、編輯者　鐵村大二、発行者・印刷者　柳沼澤介、発売元　婦人画報社、発行所　株式会社東京社

・高見順作、水田冷二画、「読切現代小説　眞砂子」、三三六～三四九頁（二段組み）、挿絵四葉（タイトルカットも含む）

なお、「眞砂子」掲載誌の無署名「編輯後記」には、次の言及がみられる。

小説は懸賞悲劇小説で二等に当選した畑惇市氏、をはじめ今をときめく新進高見順氏、現代小説一方の雄戸川貞雄氏の三氏、その他、どの一篇をとりあげても、失望なさるやうなことは絶対にありません。（三五二頁）

ここで「今をときめく新進高見順氏」と称された状況や「眞砂子」の位置づけについて考えるために、以下、昭和十一年に高見順が発表した主要創作を確認してみよう。

この時期には、前年から連載が始まり、第一回芥川賞候補作ともなった「故旧忘れ得べき」（『日暦』昭10・2～5、7／『人民文庫』昭11・3～5、7～9）が断続的に発表されると同時に、方法論的なマニフェスト「描写のうしろに寝てゐられない」（『新潮』昭11・5）が話題になった。

・「菊坂ルムペン会」（『新潮』昭11・1）
・「脱脂綿」（『文藝汎論』昭11・1）
・「とっての友だち」（『作品』昭11・3）
・「路地」（『文藝』昭11・4）
・「結末」（『明朗』昭11・4）
・「晴れない日」（『日本評論』昭11・4）
・「黒い瞳」（『モダン日本』昭11・4）
・「松葉杖」（『文藝』昭11・5）
・「駅のいたづら」（『オール読物』昭11・5）
・「嗚呼いやなことだ」（『改造』昭11・6）
・「夜」（『三田文学』昭11・6）
・「暗い日曜日」（『若草』昭11・8）
・「見たざま」（『日本評論』昭11・9）
・「虚実」（『改造』昭11・11）

こうしてみると明らかなように、昭和十前後の高見順評価は、その代表作「故旧忘れ得べき」のみによって形成されたものではなく、総合雑誌・文芸雑誌に発表された他の創作もまた大きく関わっていたのだ[7]。そのこととあわせて注目しておきたいのは、すでに複数の総合雑誌からの原稿依頼さえきていた高見順だが、同時に商業文芸誌の他、『文藝汎論』、『作品』、『若草』、『モダン日本』、『オール読物』など、同人誌や大衆文学雑誌といったさまざまなタイプの読者層をもった雑誌にも創作を発表していたという事実である。この間の事情については、当時を振り返る座談会[8]に次のような言及がみられる。

編集者　収入のことですが、当時中間小説のような楽に書くものを昭和作家は書いていられたようですけれども、そのころたとえば「モダン日本」とかああいうものは、「新潮」とか「中央公論」などと比べると、今とは逆で、稿料は半分くらいだったということですが。

こうした問いかけに、「中間小説は前後じゃないですか」と応じた舟橋聖一につづいて、平野謙は次のように述べており、注目される。

平野　中間小説というのは戦後の現象だけれども。たとえば高見順さんは「故旧忘れ得べき」で芥川賞の候補になつて、「改造」や「中央公論」「新潮」などにも書けるようになつた。しかしそれでもまだ勤めはやめ

られないわけだ。どこかの新聞小説に連載ができるということになると勤めをやめて、しかしやめてからも新聞小説をずっと書いているわけではないから、「モダン日本」とか「オール読物」とか、そういういわゆる純文学の雑誌でないところに読物を書く。高見さん流にいえば売り絵を書く。そういう売り絵の原稿料はちゃんとした文芸雑誌より値段が安かったということはどうもほんとうらしいな。

前掲の通り、さまざまな媒体に小説を発表していた高見順をはじめ、当時の新進作家をめぐる状況（小説の多様な発表先）は、こうした発言によっても裏づけられるだろう。

さて、「眞砂子」という作品についても、簡単にふれておきたい。

「眞砂子」は、「あ！　そのトランク！」「殺人トランク」「奪はれた接吻（キッス）」「現れたその人」「打たれる処女」「死の電話」「水に散る」の七章からなる、探偵ものの一種である。

内容としては、小説家にして本作の語り手でもある「私」が、Tという同業者から譲り受けたトランク（Tは上海で買ったのだという）がきっかけとなって、宿泊を渋られたSホテルで女給仕・秀子から聞いた話を、「物語風に整理」したものである。その秀子が語るのは、タイトルにも掲げられている眞砂子の数奇な運命である。ひったくり犯の青年・鷲尾俊一に見初められた眞砂子は、ハンドバッグのかわりに唇を奪われ、恋心を抱く。数か月後、眞砂子はSホテルに宿泊に来た鷲尾と再会するが、彼は阿片密輸入団の一員で、その首領・萬里子の情夫でもあった。それゆえに、萬里子の嫉妬の対象となってしまう眞砂子は、子分に捕らえられた上に酷い目にあわされ、おそらくはそのことを悲観して自殺してしまう。この間、窮地に陥った鷲尾に頼まれて、危険を顧みずに眞砂子が届けようとしていたトランクこそ、いまは「私」が持つトランクであり、それゆえに秀子は「私」に眞砂子の運命を語ることにもなったのだ。

いわゆる通俗小説らしさを、設定や展開、登場人物等々にみてとることは容易だが、一方で、語り方や自己言及など、高見順らしい話法が随所にみられもして、「眞砂子」は作風の幅を示すものとしても注目される。また、上記の内容・文体は、『奥の奥』という媒体の特徴にも適合したもので、その意味では、高見順は新進作家らしく（というべきか）、独自の話法を用いながらも、読者層のニーズにこたえようとしていた痕跡もみてとれる。

以下に、高見順「眞砂子」全文を掲げておく（なお初出

の総ルビをパラルビに、漢字は原則として現行の字体に改めた)。

＊＊＊

読切現代小説

眞砂子

高見　順　作
水田冷二　画

「あ！　そのトランク！」

家では原稿が書けない癖がついて了つた。

私はこの間中、トランクをさげて、市中のホテルを転々として歩いた。AホテルからMホテルへ、それからSホテルへ――。

Sホテルは、とある公園に間近いビルディングの七階にある。そのビルディングはある財団法人の会館で、七階が宿泊所になつゐるのだ。Sホテルと名付けられてはゐるが、普通のホテルとは烏渡ちがつたもので、私は初めその会館の何等かの関係者でないと泊めてくれないのではないかと危ぶみ乍ら、とにかく当つて見ようと思つて、一階の受附に立つた。

『ものを書きたいのですが……』

私が宿泊の目的を告げると、受附の男は、左見右見して私の余り芳しくない風態人相をうかがふ眼付であつたが、軈て、

『生憎く、みんなふさがつてゐます。』

といふ返事だ。

ほんとにふさがつてゐるなら、私の風態をしらべてから、やをら返事をする必要はない筈だと、私はひがんだ。

『関係者でないと駄目なんですか。』

『さういふ規定はありませんが……』

まぶしさうにして私の視線を避ける。

部屋はあるんだが、ウソをついてゐるな。――さう思ふと、私も意地になつた。

――僕は家が大森にあるので、強ひて泊らなくてもいいんです。家では原稿が書けないので、昼間だけかして貰つてもいいんだ。夕方から宿泊者がくる約束になつてゐて、昼間はあいてゐるといつた部屋はありませんか。そしたら

夕方まで居て、夕方になつたら帰るけど……』
『……』
『これから又ほかのホテルへ行くといふのは億劫で、――なんとか成りませんかなア。』
Mホテルへ帰ればいい訳だが、隣りの部屋に若い男女がやつてきてキャツキャツと騒ぐのに気色を悪くして出て来た私が、再びノコノコと帰つて行くのも業腹な上に、――ここの受附に敬遠されたとなると、意地でものし入り度くなつたのである。
『なんとか頼みます。』
そして二三の押問答をしたのち、
『――六時まで空いてゐる部屋が、ひとつありますから！』
さう受附の男に言はせることに私は成功した。
エレベーターに乗つて七階へ行つた。
『ここは仲々やかましいんだね。僕は人相が悪く風態が変なものだから、下ですつかり危しまれた。』
部屋に導かれ乍ら、さう言つた。
『さういふ訳ではございませんが……』
が―といふのが私の耳に残つた。
附近の公園が一眸の下に眺められる風通しのいい部屋に入ると、私は水差に水をくれる様にと頼んだ。原稿を書いてゐる間、水をガブガブと飲む習慣なのである。
私は早速トランクを開いて、インキと原稿用紙を取り出した。
扉をノックする音に、
『はい。』
といふと、はじめの女とは違つた若い女性が水差を捧げて部屋のなかに入つてきたが、私のトランクに眼をやると、
『あ！　そのトランク！』
おそろしい声を発して、水差を取りおとした。激しい音とともに、水と硝子の破片が散乱した。

殺人トランク

私は度胆を抜かれて、しばし口がきけなかつた。――そして、私以上に、その若い給仕女は深い驚愕と恐怖に噛まれて蒼白の唇をブルブルと震はせてゐる。
『一体、これは何事です。』
生唾を呑み込むと、やつと私はさう言ふことが出来た。
『どうしたといふ訳だ。……』
若い女は、いたづらに唇を痙攣させるだけで言葉を発す

ることができないらしいのに、
『――このトランクを見て、君はびつくりしたらしいが……』
私が言ふと、
『あ、あなたは……』
お前は一体何者だ。――さう言い度いらしい彼女の眼付である。衝撃のため釣り上つた瞳孔から、こまかい針のやうな鋭い光りが溢れ出、私の顔をチカチカと刺すのから、私は面(おもて)をそむけ、
『僕は、――僕は榊原といふもんで。ここへ仕事に来たのだが……』
『仕事？』
悲鳴のやうな声を再びあげた。
『僕は小説を書く男で、あやしいものではないよ。』
『そ、それは……』
彼女は美しい指を私のトランクに向けた。
このトランクは私の自慢のものであつた。今年の春、私の友人で矢張り小説を書くTといふ男が上海へ遊びに行き、上海で彼が買つてきたトランクである。隅は既に傷んで革が破れ、もうすつかり古びてゐるトランクだが、世界を一周してきて、いろいろなところの夢をひそかに抱いてゐるやうなスペイン製のトランクである。スペインで出来たといふことが、既に浪漫的(ロマンティック)であつた。血を吹いて倒れた闘牛の革皮(かは)から作られたやうな夢想を呼び、尚その革皮の上には、世界各国のホテルのラベルがいつぱい張りつけてある。今はもう、幾星霜(いくせいそう)の風雨に印刷がうすれて、はつきりとは読みがたい様になつてゐるけれど、それは余計、興趣をふかめるものであつた。
友人Tは上海の露天から堀り出して買つてきたものださうだが、私は彼から殆んど無理やりに近い方法で譲り受けたものである。
さうした由来を簡単に告げると、Sホテルの若い給仕女は半信半疑の面持ではあつたが、いくらか心の落ちついた声で、
『鷲尾さんといふ方、御存知ありません？』
『鷲尾？――さア？　男？　女？』
『男の方です。』
『なにする人？』
『……』
『僕の友人には、鷲尾といふ姓の男はゐないが……どうして？』
『御存知なければ、いいんです。』

怒つたやうな口調で言ふと、
『――失礼いたしました。』
今度は取り乱した自分を恥ぢるやうな物腰で丁寧にお辞儀をし、
『只今とりかたづけます。』
そしてフラフラした足どりで部屋を去らうとする。
『――待つて。』
私は彼女の前に立ちふさがり、
『僕のトランクには、なにかあなたに関係した恐ろしい事件因縁があるやうだが、……』
『私の大好きな眞砂子さんを殺したんです。』
『殺した？　誰が？』
『そのトランクが――』
――そして彼女が、乱れた語調で物語つてくれた、トランクにまつはる因縁話は、私を殊の外、驚かせた。
眞砂子といふ女性は、語り手と同じくこのSホテルの女給仕であつたが、――さうだ、可哀さうな眞砂子の話は節を改め、これを一応、物語風に整理して読者に紹介することにしよう。
Sホテルがいくら普通のホテルと違つたものとはいへ、客の吟味選択をするのが余りひどすぎると私は思つたが、それは次のやうな秘められた事件があつたからだつた。

奪はれた接吻（キッス）

物語の発端は、晩春の夜、新緑匂ふ郊外の道であつた――
Sホテルの美しい女給仕の眞砂子は、前夜、ホテルの宿直をして、その日の午後二時に、勤めから解放された。そして映画を見ての、今は帰りであつた。
家には兄と姉がゐて、眞砂子は末子（まつし）として一家のものから可愛がられてゐた。その愛情は十九の眞砂子に、十六か十七位の無邪気さと可憐さを与へてゐて、ホテルでも誰も眞砂子を十九と見るものはなかつた。
『眞砂坊――』
家でもホテルでも、さう呼ばれてゐた。
しかし、眞砂子の胸のなかには、漸く十九の乙女（をとめ）らしい焔が燃えはじめてゐた。
瞼の裏に凛々（りゝ）しい青年をおもひゑがき、ひとりで頬を赧らめてゐた。しかし、それは夢想するだけのことで、眞砂子の前にはまだ実在の青年は現れてゐなかつた。
家に近い生垣の道であつた。

映画で見た若い男女の接吻（キッス）の姿が、熱つぽく消しがたい印象を、眞砂子の胸に刻みつけてゐた。暗い郊外の道で、彼女は胸のなかに秘めた影像（イメーヂ）の若い女に、そつと自分を当てはめて見た。青春の血が躍り、おもはず、

『あツ！』

と叫んだ。

すると、次の瞬間、映画から抜け出てきたやうな颯爽たるひとりの青年が、彼女の前に、すツと現れた。

『あツ！』

彼女の唇から再び、小さい叫びが洩れた。

『――静かに。』

青年はさう言つて、彼女の肩をつかんだ。――背の高い、肩はゞの広い、いつも彼女が瞼の裏にゑがいてゐる夢想の恋人にそつくりの青年である。暗闇から突然、男が飛び出てきて彼女に襲ひかゝつてきたといふより、しよつちう彼女の会つてゐる恋人が、さうして彼女を驚かせ、驚かすことによつて彼女を喜ばさうといつた魂胆で、道に待ち伏せしてゐたやうな感じである。

『――おい、ハンドバッグをこつちへ出せ。』

さう言はれても、まだ夢と現実の区別がつかない顔であつた。青年には、それが激しい驚きと恐れから呆然としてゐるものと見えたらしく、憐れむやうな眼差を彼女の美しい顔に注いでゐたが、つと、手を延して彼女の背を抱くと、宛（あた）かも接吻を待つゐるやうな恰好に顎をあげ、可愛らしい唇を半開きにした彼女の顔に、自分の唇を押し当てた。

彼女は生きた人形のやうであつた。いささかの抵抗も示さず、――それはかへつて青年に不安を与へた。

長い接吻ののち、青年があわてゝ顔をはなすと、彼女は青年の手のなかで、ずるずるとくづれ相になつた。背に廻した手を放すことができない。

長い睫毛をパツチリと開いた眼は、まつすぐ青年の顔に注がれてゐる。その眼には、すこしの不安の翳もなく、その顔は天使のやうに安らかである。――青年は胸ぐツと射貫かれるものを感じ、悪戯心（いたづら）とはちがつた、はげしい接吻の雨を彼女の顔に降り注いだ。

――背後（うしろ）に、人の足音がする。

『――ごめんよ！』

彼女の耳許（みみもと）にさう囁くと青年は彼女の背から、その逞しい手を離した。すると支へを失つた人形のやうにふらふらと身体を倒しかける彼女の腕を青年は、

『しつかり――』

さう叫んで、つかんだ。

『ごめん！　許してくれ！』
迫つてくる人の足音に、あせつた青年は、丁度活を入れるみたいに、彼女の耳に口を近付け、切なさうな声でさう言ひ終ると、さツと暗闇に身を隠した。
彼女はその場にヘタヘタと、しやがみ込んだ。
『どうしました。』
近づいた四十恰好の婦人が声をかけた。
『――お腹でも痛いんですか。大丈夫ですか。』
やさしく肩に手をやり、
『どなたかお連れがあつたやうですが、――お医者を呼びに行つたのですか。』
眞砂子は静かに顔をあげた。
『有難うございます。――いいえ、なんでもないんですの。』
さう言ふと、バネ仕掛の人形のやうに、すツと立ち上り、驚いた婦人をそこに残して、小さい弾丸のやうに走り去つた。

現れたその人

軈て夏もすぎ、秋が近づいてきた。
悪夢のやうな、あの事件からすでに数ケ月が過ぎ去つてゐたが、あの事件が彼女の心に残して行つた傷痕は、その月日の間に、すこしも癒へようとしなかつた。
彼女の唇をはじめて奪つて行つた若い青年を、いつか恋ひ慕ふ彼女になつてゐた。だが、こんな呪はれた恋があるだらうか。――恋は心の傷といはれ、悲しいものとはされてゐるが、こんないたましい傷があるだらうか。
『――眞砂坊。どうしたの。この頃、ちつとも元気がないぢやないの。』
仲良しの秀子が憂ひ顔を寄せた。
（秀子といふのは、この物語を私に話してくれた、女性である。私のトランクを見て、水差を取り落したSホテルの女給仕の名である。）
『――なんでもないの。』
眞砂子は長い睫毛を伏せた。美しい眉毛の下に、愁ひの翳のやうな淡い窪みができてゐる。呪はれた恋の窶れであらう。
『眞砂坊は恋愛をしてゐるんぢやない。』
秀子が悪戯さうに眼をパチパチさせると、
『しらないわ！』
プイと背を見せ、
『そんなこと言つちや、いや！』

泣き声で言ふので、
『――ごめんなさいね。』
秀子はさう言ひ乍ら、
（眞砂坊は――矢張り恋愛をしてゐるんだわ）
眞砂子の背に、頷くのだつた。
それから数日後のことであつた。
前夜宿直をした秀子が、交代の眞砂子に引きつぎをして、
『六番に新しい人がきたわ。昨夜（ゆふべ）、おそく……』
『さう。』
『ちよつと綺麗（ハンサム）な青年よ。――だけど、眼付がとても悪いの、じツと見られると、こはい感じだわ。』
『いまゐるの。』
『ずツと部屋にこもつたきりなの。――一時間おき位に、やつぱり眼付の悪い男が訪ねてきて、なにか話しをすると、ソハソハと出て行くの。そして、本人はじツと部屋に閉ぢこもつてゐるきり。……綺麗だけど、ちよつと気味が悪い男だわ。』
ベルが鳴つて話が中断された。
『うはさをすれば、なんとかで、……六番からだわ。』
秀子は廊下を走つて行つたが、やがて戻つてくると、
『――いやアね。夕刊、夕刊ツて。』
『夕刊？』
『夕刊がまだ来ないかツて、先刻（さつき）からうるさくつて仕様がないの。昼間から出る夕刊なんて、ありやアしないわ。』
『毎夕なら……』
『いやな眞砂坊。お客さんと同じやうなことを言つて……』
『ホテルでは取つてないから困つたわね。』
『外へ行つて買つてきてくれツて。』
『ぢや、あたし、行くわ。』
『いいわ、あたし行くから。』
『いいの。』
眞砂子は、さうして駅まで新聞を買ひに行つた。――街は風ひどかつた。
七階に戻ると、秀子の姿が見えないので、眞砂子はそのまま、六番の部屋まで行つて、ノックしてから、いつもの習慣で扉（ドア）のノツブに手を掛けたが、鍵（ママ）がかかつてゐる。若い男女の客などは一階の受附で断つてゐるこのSホテルでは、昼間部屋に鍵をかけてゐる客は珍しいことだつた。
カチヤリと鍵を外す音がして、扉が用心深く細目にあけられ、鋭い目が光つた。眞砂子は気味悪く、一足後退（あとずさ）りすると、

『どうぞ。』
さう言はれて、扉を押し、なかにはいて、客の顔を見るとおもはず彼女は『あッ』と言つた。
客は、あの夜の青年に違ひなかつた。——あの夜の暗さのなかでは、青年の顔容を明瞭に見ることは出来なかつたのだが、いはゞ第六感といつたもので、——あの人に違ひない、さうピンときたのであつた。
殆んど同時に、青年の唇からも短い叫びが発せられた。

打たれる処女

『あなたは——』
『君は——』
二人の口から同時に出た。
眞砂子の身体は痺れたやうになつて、そこに立ち竦んだ。
この数ケ月間、忘れようとして忘れることのできなかつたその人に、今ふたたび会ふことの出来た喜び、そしてその人が『君は——』と呼びかけることによつて自分を忘れてはゐない事を明らかにした喜び、——息つまる感動が彼女の全身を馳せた。しかし忽ち、それは恐怖にかはつた。
彼女の前に初めてあらはれた時の彼は、——彼は彼女から金を強奪しようとして暗闇から襲ひかゝつてきたのだ。そして彼女の美しさに打たれて、金のかはりに接吻を奪つて行つた。
そして再び現れた今の彼は、——人目を忍ぶ犯罪者の暗い翳を、彼女の眼からかくすことが出来なかつた。
『いつぞやは……』
彼は手をのばして扉をしめると、
『いつぞやの失礼を宥して下さい。』
その顔は蒼く緊張し、その声には真摯なものが響いてゐる
『かう言つて謝るのは、あれが決して、その場の気紛れ、いたづらではなかつたからで……。それを、あなたに了解して貰ひたいからです。』
青年は美しい眉を寄せ、唇を噛んだ。
『——さうだ。あの時は成程、気紛れだつたかもしれない。ちよつとした悪戯心だつたかもしれない。だが、それが、さうでなくなつた。忘れられないものになつたのだ。あなたはあの時から、僕にとつて忘れられない人になつたのだ。』
深い溜息をついた。眞砂子の耳には、青年の言葉が夢の

なかの歌声のやうにきかれた。
『こんな所で、あなたに再び会へようとは……。だが、もう遅い』彼は自嘲の歪みを頬に見せ『――遅いも速いもない。僕のやうなものが、あなたを恋するなんてことが土台まちがつてゐるんだ。でも矢張り会へてよかつた。うれしい。――あなたに僕のこの気持を伝へ、あなたに詫びる機会に恵まれて、僕は迚(とて)もうれしい。許してくれますか。』
眞砂子は悲しげに頷いた。
『有難う。』
かすれた声で、殆んど叫ぶみたいにして言ふと、眞砂子の肩に逞しい手をかけ、ぐいと引きよせた。
あの夜と同じ接吻の雨が彼女の顔に降つてきた。彼女は喜びと悲しみと恐れとで気が狂ひさうであつた。
その時、背後(うしろ)の扉が音もなく開かれた。(眞砂子の出現が、鍵をかける用心深さを失はせたのだ。)
『俊ちやん!』
女の叫び声が、眞砂子の背に鋭利な刃(やひば)の如く突きささつた。
『この阿魔かい。――こいつが俊ちやんを裏切者にしたんだね。』
青年の手が眞砂子の背を離れると同時と、女の手が荒々しく彼女の肩を摑んだ。
『姐さん。違ふ。違ふ。――この子は……』
青年が必死の口調で弁解するのを、
『おだまり!』
さう言ふと、
『このすべた!』
はげしい罵りと共に、女の手が眞砂子の頬をはつしと打つた。眞砂子は顔を蔽つて、その場に打ち倒れた。
女は――三十前後と見られる妖艶な顔を嫉妬と憎悪に歪めて、眞砂子の身体を今度は、その足で蹴りつゞけた。『俊ちやんも俊ちやんなら、この阿魔もこの阿魔だ。――子供の癖にしやがつて、よくも図々しく……』
青年はその間に、トランクを押入のなかに隠すと、
『なんにも知らない子に、なんてことをしやアがる。』
女に飛び掛つて行つて、忽ちそこにねぢ伏せると、女の手を後にねぢあげ乍ら、
『――許してくれ。』
片手で眞砂子の肩をゆすぶり、
『名前は、――なんといふの、名前を教へてくれ。』
『――眞砂子。』
微かに言ふと、

『――ぢやア仕合はせに暮しなよ。』
さう言つて青年は脱兎のやうに部屋から姿を消した。
『俊ちやん！』
女は裾を乱して跡を追つた。

死の電話

その夜、ホテルの眞砂子に電話がかかつてきた。青年からであつた。
押入に隠したトランクを、乾分にとりに行かせようとおもつたが、乾分（こぶん）との連絡がつかない。グヅグヅしてゐると、身に危険が迫るので、明朝、指定の場所まで眞砂子に持つてきて貰ひたい。――さういふ電話であつた。
『いやだつたら持つてこなくてもいい。――それはかまはないけど……』
青年の声には哀愁がこもつてゐた。
『たゞ僕は――もう一度、眞砂子に会ひたいのだ。僕は日本から逃げて行く。もう眞砂子に会へないんだ。』
眞砂子と呼びすてにした。その響きには悲しい愛情が脈々と波立つてゐた。
『行きます。――きつと行きます。』
眞砂子の眼には小さい涙が光つてゐた。
その夜、彼女は秀子に電報を打つた。既に、死の予感が彼女を訪れたせいかもしれない。
翌朝、秀子がSホテルへ飛んできた。
『どうしたの、一体。』
まんじりともせずに一夜を明かし、げつそりと頬を痩せ衰へさせた哀れな眞砂子を胸のなかに抱きかゝへ、
『話して、――みんな話して、眞砂坊。』
眞砂子は子供のやうに首を振つて頷いた。秀子にだけは、みんな打ちあける心算（つもり）で、電報も打つた。
眞砂子は、いはゞ死に面した女の冷静さで、一部始終を物語つた。
『――で、眞砂坊はトランク持つて行くつもり？』
美しい顔を静かに伏せる眞砂子に、
『駄目！――不可（いけ）ない。』
立ちはだかつて手をひろげる風の秀子の言葉に『何故？』――眞砂子はさう反問する眼をあげた。湖のやうに清く澄んだ瞳である。今度は秀子の顔が苦しげに伏せられて行つた。
やがて眞砂子は重たいトランクをさげて、約束の場所である勝鬨（かちどき）の渡しへと赴いた。

（そのトランクこそが、現在筆者の私が所有し自慢してゐる例のトランクなのである）

――そして、その儘、眞砂子はSホテルへ帰つてこなかつた。恋人と一緒に海の外へ逃れて行つたのだらう。秀子はさう思ひ、眞砂子の将来を神に祈るのであつた。――恋は女を強くする。

だが、それから三日ののち、秀子は隅田川に投身自殺した眞砂子の可哀さうな死体を見なければならなかつた。どうして自殺したのか。秀子には分らなかつた。その経緯が分る迄には、十数日待たなければならなかつた。

阿片密輸の一団捕はる。首領は妖艶な女性。――さうした新聞記事が眞砂子の死因を明らかにした。

水に散る

その朝、眞砂子はSホテルから出ると、すぐに怪しい二人の男に跡をつけれてゐた。

阿片密輸入団の首領、入墨の萬里子の乾分である。彼女は青年の部屋に闖入してきて、眞砂子を罵り蹴つた例の女で、青年は彼女の情夫であつた。鷲尾俊一といふのが、青年の名である。

俊一がきつと眞砂子へ呼び出しの電話をかけるにちがひないと萬里子は考へ行方をくらました俊一の居所をつきとめる為にSホテルの前に乾分を張り込ませてゐたのだ。――それを予測しない俊一でもなかつたが、当局の追及の激しく迫つてきた現在、俊一をさがすことより、自分たちの身の保全の方にいがしいにちがひないとしてゐた。ところが萬里子は、自分や仲間を裏切つた俊一を探し出す方に、むしろ必死であつた。

俊一が仲間を裏切つたのは、萬里子の情夫であることから自分を解放したい為であつて、仲間そのものを裏切る気持ではなかつたのだ。――

眞砂子は手をあげて自動車をとめようとした。

すると、背後の二人の男がバラバラッと駆け寄つてきて、

『おッと、待ちねえ。』

眞砂子の腕を両方からつかんだ。

『騒ぐと、ためにならねえぞ。』

そして自動車を走らせ新しい自動車に向つて、片方の男が手をあげた。

男に両腕をとられて眞砂子が自動車に足をかけようとした瞬間、また一人の男が飛鳥のやうに駆けよつてきて、あ

ツといふ間に、トランクを攫(さら)つて行つた。
『野郎！』
顎に傷痕のある背の低い男が、掠奪者の跡を追はうとすると、
『よせ。――後ですぐ戻つてくらア。』
片方がさう言つてとめた。俊一の居所さへ分れば、トランクは取りかへせるといふ意味だが、――この横合ひから飛び出してきた男は、トランクを俊一のところへ持つて行くのではなかつた。俊一がSホテルにゐることを萬里子に売り込んだ俊一の乾分で、トランクを独りで横奪(よこどり)したのであつた。
勝鬨の渡しよりずつと上の隅田川の河岸で、眞砂子は車をおろされた。そして路地をくねくねと歩き廻つた後、同じ隅田川に面した汚い二階屋に連れこまれた。
二階には萬里子がゐて、
『やい、このすべた――朝ツぱらから、どこで逢曳(あひびき)をするつもりだつたんだ。素直に白状しないと痛い目に会はせるぞ。』
眞砂子は唇を噛んでゐた。
恐ろしい折檻がはじまつた。だが彼女は唇を食ひ縛つたままだつた。
――俊一の前に、かうして到頭、眞砂子は姿を見せることが出来なかつた。俊一は何やら悲しげな呟きを洩らすと、そのまゝ姿を消した。
『人質をとつてある以上、今に俊公も降参してくるだらう。』
トランクを攫つて行つた男が、俊一に事情を話してゐることを萬里子は考へてゐた。
『――俊公に帰す前に、お前たちもひとつ、あやかつたらどうだい。』
嫉妬に狂つた妖婦は、うしろ手に縛り上げられた眞砂子の身体を、乾分の前に投げ与へた。
その夜半、眞砂子は二階から隅田川に身を投じたのであつた。
鷲尾俊一の行方は杳(よう)として分らない。
そして現在、私の手許にある例のトランクだが、これがどうして上海にまで流れて行つたか、その経路も亦不明である。（八・一二）

【注】

1　斎藤理生「太宰治「二十世紀旗手」評釈（一）～（五）」（『太宰治研究21～25』和泉書院、平25～29）。他にも『奥の奥』掲載の高見順作品として、「恋愛時評」（昭11・8）、「帰りなんいざ」（昭11・12）、「ある夫婦」（昭12・4）を発表している。なお、これらは小野芙紗子編「著作目録」（『高見順全集　別巻』勁草書房、昭52）で言及されながら、「発表年月・発表誌紙不詳」となっていたもので、今回斎藤氏の調査によって判明したものである。

2　斎藤理生「太宰治「二十世紀旗手」評釈（三）」（『太宰治研究23』和泉書院、平27）。

3　津島美知子「奥の奥」（同『回想の太宰治』講談社〔文芸文庫〕、平20）。

4　注（3）に同じ。

5　拙著『昭和十年前後の太宰治　〈青年〉・メディア・テクスト』（ひつじ書房、平21）、拙論「昭和一〇年前後の新人（言説）――雑誌『作品』と石川淳」（同『昭和一〇年代の文学場を考える　新人・太宰治・戦争文学』立教大学出版会、平27）参照。

6　注（1）に同じ。

7　拙論「「高見順の時代」――「故旧忘れ得べき」と短編群」（同『昭和一〇年代の文学場を考える』前掲）参照。

8　河上徹太郎・舟橋聖一・平野謙「座談会　昭和十年代の文学」（『群像』昭40・3）。

（神奈川大学）